

山本泰次郎先生と内村鑑三



山本泰次郎先生

此の度は、私どもの小さな集まり「テ
コア聖書集会」の「五十周年記念文集」
が、高木先生のお目にとまったのがきつ
かけとなり、「山本泰次郎」をめぐって
何か話をするように、というお招きを受
けて参上いたしました。

このような機会をお与え下さいましたご厚情を、深く感謝申し
上げます。

山本泰次郎―生涯・信仰・伝道

山本泰次郎先生は、内村鑑三にその晩年十年にわたって師事し
た独立伝道者です。同門に石原兵永、政池仁、鈴木弼美、湯沢健、
片山徹、鈴木虎秋、牧野正路などの諸氏が居られます。

先生は一九〇〇（明治三三）年九月、神奈川県片瀬に生まれ、
二一年東京高等工業学校（現東京工大）紡績科を卒業して、農商
務省（現経済産業省）技官となりました。在学中の二〇（大正九）
年一月、内村の聖書講演会に出席、「初めてキリスト教に接し、
その日、完全にそのとりことなった」のでした。

関東大震災後の二三年秋には、「十字架の贖罪の福音に救われ
て新生の喜びに躍りつつ、柏木の青年会に参加」、その二年後に

始まった塚本虎二の「ギリシア語聖書研究会」A組にも加わって
ギリシア語を学びました。

一九三〇（昭和五）年三月、内村の永眠にあい、「天蓋の孤児
となる。爾後なにびとも師事せず」と言っています。

三一年、金解禁事件に伴う官吏減俸反対運動に反対して農商務
省を辞し、「専心聖書の研究に従うべく決意」し、三四年九月、
処女作『ダビデ伝』を刊行、同時に月刊誌『聖書講義』を創刊し
て独立伝道に立ちました。

一九四五年五月北海道帯広市に疎開、市立工業高校に教鞭をと
りつつ日曜集会を続けました。この間聖霊の恩賜に浴して「信仰
上得るところあり」、伝道への新たな決意をもって戦後の東京に
戻りました。

そして五〇（昭和二五）年一月、先にいったん廃刊した『聖書
講義』を復刊しました（第六一号）。以降七九（昭和五四）年三
月心筋梗塞によって召されるまで、自宅における日曜聖書集会の
ほか専ら同誌に拠り、「聖書を国民の書に、国民を聖書の民に」
をモットーとして、誌名そのままに専心聖書を講義し、聖書キリ
スト教の伝道に献身したのでした。

これは後で改めて申すことですが、この先生の伝道の唯一の例
外は、恩師内村鑑三先生について語ったことです。教文館版『内
村鑑三全集』をはじめとして、内村の著作の編集、解説、翻訳あ
るいは内村の評伝などを通して、内村のキリスト教の本質を明ら
かにすることに渾身の努力を傾注されました。

伝道者としての山本先生の本領は、その文書伝道にありました。『聖書講義双書』の刊行に当たって次のように言っておられます。「日本伝道の方法いかんは、実に重大な問題です。著者（山本）はあらゆる観点からして、文書伝道、特に聖書を注解して提供することこそ、日本伝道として最善である、いな唯一の道であると思ひ、今日までそのために、すべてを忘れ、すべてをささげてきました。」

「文書伝道が日本伝道の唯一の道である」と信じた先生は、ご家族を中心とする日曜日の集まり以外には、地方出張伝道はおろか講演さえもほとんどなさらずに、ただひたすら一本のペンに、その聖書研究と伝道生活のすべてを託されたのです。この点で先生は、文書伝道者の多い無教会の中でも最も徹底しておられたと思います。

徹底していると言えば、先生はあらゆる点において徹底していました。特に「聖書を注解して提供すること」においてそうでした。先生の伝道誌『聖書講義』はその名の通り徹底して聖書講義の雑誌でした。巻頭言と末尾の日誌を除けば、すべてが聖書の注解でした。その巻頭言、日誌といえども、それぞれが先生の聖書研究の凝縮であり、その日常への適用でした。先生は自ら言われたように、確かに「聖書キリスト教を信ずる聖書信者」であられました。

先生の聖書講義は、先生自ら言われるように、「ひとりの日本人が直ちに神を信じ、キリストを仰ぎつつ、ただ十字架の贖罪の福音に救われた喜びに躍りながら一生涯を送った信仰の告白の記

録」です。それは学問的注解とも違ふし、説教的靈解でもない。堅固で厳密な学問的研究に支えられつつも、厳しい人生体験と豊かな常識に裏打ちされた聖書講義で、内容・文章ともに極めて明晰であることを特徴とします。為に時には読む人の心を鋭く刺してやまない厳しい言葉ともなるのですが、それゆえにこそ、それはまた深い福音の慰めと、力強い信仰的励ましとに満ちております。

序でながら、一つ付け加えて申しておきたいことがあります。先生はこの『聖書講義』の発行をもって自分のすべてであるとし、それをもって自分の生活を維持すべきであると考えました。そのため、多くの不便と労苦にもかかわらず、友人たちの援助によつたわずかの一時期を除き、これを一貫して孔版印刷と手作り製本で発行し、晩年病気で倒れるまでは、自ら鉄筆を握り聖書とその講義を一字一字刻んで、雑誌を造られました。ひとえに、信仰と生活の独立を守るためでした。

山本先生の信仰については、ここに永眠直前の信仰短言二篇を引いて、先生ご自身に語っていただくこうと思います。

義なる神の救い

もし、わたしたちが自分の罪を告白するならば、神は真実で正しいかたであるから、その罪をゆるし、すべての不義からわたしたちをきよめて下さる。（一ヨハ一・九）

ここに「正・し・い・か・た・は・義・（正・義）である。神は義（正義）に

いますが故に、われらの罪をゆるし、きよめて下さる」とのことである。「神は愛である」（四・八）、「主はわたしたちのためにいのちを捨てて下さった。それによって、わたしたちは愛ということを知った。それゆえに、わたしたちもまた、兄弟のためにいのちを捨てるべきである」（三・一六）との至高の愛の福音を教えた愛の使徒ヨハネは、神は愛であるから、愛によってわれらの罪をゆるして下さった、とは言わず、神は義（正義）にいますが故に、義（正義）によってわれらの罪をゆるして下さった、と主張する。

神は愛であり、全能者であるから、その無限の愛をもって無条件に、無限にわれらの罪をお許しになることができる。しかし神にはできなかった。神は義（正義）であるからである。故に神は御子キリストをつかわし、十字架につけて、その血の贖いによってわれらの罪をゆるし、われらを義として救いたもうたのである。

神は愛である。神はそのひとり子を世につかわし、彼によってわたしたちを生きるようにして下さった。それによって、わたしたちに対する神の愛が明らかにされたのである。わたしたちが神を愛したのではなく、神がわたしたちを愛して下さって、わたしたちの罪のためにあがないの供え物として、御子をおつかわしになった。ここに愛がある。（四・八〜一〇）

神は愛である。しかし義なる神は無条件に人の罪をゆるさず義（正義）によって、御子の血の供え物によって、われらを義として救って下さったのである。これが神の救いである。

これがわれらの救いである。われらは神に愛せられて、義とされて救われたのである。無限の慈悲によって救われたのではなく、義なる神に義とされて救われたのである。故にわれらの救いは、カルバリ丘上の主の十字架にあり、千代経し岩と共に確実である。

われらの神は義（正義）であり、われらを義（正義）によって救いたもう愛の神である。われらは義とされて救われたのである。（七九年二月）

平安の道

わたしは、神に生きるために、律法によって律法に死んだ。わたしはキリストと共に十字架につけられた。生きているのは、もはや、わたしではない。キリストが、わたしのうちに生きておられるのである。しかし、わたしがいま肉にあつて生きているのは、わたしを愛し、わたしのためにご自身をささげられた神の御子を信じる信仰によって生きているのである。（ガラテヤ二・一九〜二〇）

初め、わたしはキリストの十字架の福音、即ち贖罪を信じる信仰さえ得られれば、と必死に努め、励んだ。そして苦闘幾年の後、わたしはようやく十字架を仰いで、その前に信仰を告白することができた。わたしは天地におどるほどの喜びに酔った。そして、もはや、ほかに、何もいらなうと思つた。

しかしその喜びは長く続かなかつた。わたしは再び不安と悲

しみの人となった。自分がまだ真の平安を得ていない事に気付いたのである。わたしは再び霊の苦悶の人となった。その苦しきは以前のそれにまさる幾層倍であった。それから十余年、わたしは平安なき、世にも哀れなキリスト信者であった。

しかし恵み深き父なる神は、わたしを見捨て給わなかった。

神はわたしの祈りに答えて、わたしを救って下さった。神は新しく十字架のキリストを、わたしに現わしてくださった。わたしは新しく十字架上のキリストを仰ぐことができた。しかしそのキリストは、わたしの罪の贖い主として贖罪の教義をもって信じるキリストではなかった。わたしのために十字架上に死んで下さり、（そしてわたし自身も彼と共に十字架に死に、）今復活して、わたしのうちに生きておられる、生けるキリストであった。その時、わたしは生まれて初めて、言い知れぬ平安に満たされた。わたしはついに救われたのである。

それから幾十年、わたしはただこの信仰——わたしのうちに生きておられるキリストと共に生きる信仰によって、平安と歓喜の生涯を送って来た。そして日ごとに、天国で生ける主に親しく会いまつの日の希望を強められつつ、他には何の望むところもない喜びの日々を送りつつある。

故にわたしは自分を見ない。他人を見ない。世を見ない。自分の罪や欠点や失敗に心を奪われない。他人の批判や非難を意に介さない。世の暗黒や混乱に心を乱されない。ただわたしのうちに生きていて下さる主を仰ぐ。そしてわたしは平安であり、この上なき幸いな人間である。わたしはついに平安の道を示さ

れたのである。

わたしの救いは、十字架の贖罪の教義を信じる信仰ではない。生けるキリストご自身である。今復活して、天上に神の右に座しつつ、わたしのうちに生き給い、既に死んで無となったわたしとなつて下さったキリストである。（七九年三月）

『聖書講義』誌は、先生の死とともに第四〇五号をもって終刊となりました。しかし、幸いなことに、その大部分は『山本泰次郎聖書講義双書』全一七巻として残されることになりました。これはひとえに「キリスト教図書出版社」の社主オカノ・ユキオ氏の好意と熱意によるもので、一九七五年から先生没後の八三年にかけて、同社から出版されました。

その内容は、雑誌末尾の日誌「東京だより」をはじめ、その全部または一部を割愛せざるを得なかったものもありますが、前出の『ダビデ伝』や、『信仰と人生—ヨブ記と伝道の書講解』『使徒行伝の研究』『ローマ書講義』『ガラテヤ書講義』のような既刊単行本を含む殆どすべての聖書注解が含まれています。（『本巻』一〇巻）。そのほかに、巻頭の信仰所感とも言うべき短文（前出の二篇のような）を年次別に選択編集した『信仰所感集』上・下、折々の講話、評論、講演の類を項目別に編集した『信仰論説集』上・下、特に内村に関する論稿を集めた『内村鑑三論集』の『別巻』五巻と、先生没後に、晩年の未収の著作に、告別式の記録と追悼文集とを合わせた『追加巻』二巻の全一七巻となっています。

文書伝道に献身された先生の聖書講義が、この時代の日本のキリスト教の確かな証言の一つとして、長い将来にわたって、日本の福音化のために読まれつづけていくことを切に願うものです。

山本泰次郎と内村鑑三

先に、山本先生の伝道にとって内村を語ったことは唯一の例外であった、と申しました。しかし、その若き日初めて内村の聖書講演を聞いた時、「何とも形容しがたい感動に打たれ、これこそ自分が探し求めていた救いだ、この人こそ自分を救ってくれる唯一の最後の先生だ」と思い、その死に際して「天涯の孤児となる。爾後なにびとも師事せず」と記した先生にとって、内村を語ることはむしろその伝道の欠くべからざる一環であったのです。敗戦後、伝道に専念すべく帰京した先生が早速に着手した仕事は、二冊の『書簡による内村鑑三』伝の執筆でした。一つは、内村が米国留学中に出会った実業家D・C・ベルあて、他は内村の札幌農学校における同室の友宮部金吾あての書簡によるもので、それぞれ一九四九年と五〇年に刊行されています。実は、先生にはもう一冊同種の書物があつて、それは内村の弟子のひとり斎藤宗次郎にあてた書簡によるものです。これは『内村鑑三とひとりの弟子』と題され、結局遺著として教文館から八一年に出版されました。先生の『書簡による内村鑑三』三部作は、格別に友情の人・内村を良く描き出していると思います。

先生は一九五五年、内村永眠二五周年を記念して、ひとり立つ

て「内村鑑三記念講演会」を開催されました。都内の友人牧師の教会を会場とし、四夜にわたって内村の「科学、非戦論、無教会主義、十字架の福音」について講じ、内村のキリスト教の真髄を解明しようとしたものです。

この時先生は、かねてからの塚本虎二の「無教会主義」に対する疑念を公にして、内村の無教会主義と、内村がその遺稿において「私は『今日流行の無教会主義者』にあらず」と宣言した時の「無教会主義」とは全く異質のものであることを言明しました。

内村のそれは「人の救われるはその行為によらず信仰によるとの信仰」の帰結であり、「十字架が第一主義であつて、無教会主義は第二または第三主義である。」これに対して「今日流行の無教会主義」すなわち塚本のそれは「信じてさえおればよい」とする「信仰のみの信仰」である。分かりやすく甘美であるが、その行き着くところ十字架の贖罪を無用としかねない恐るべき主義・信仰ではないか、という所論です。先生には内村の「十字架教」が単なる「無教会主義」として伝えられることに堪えられなかったのです。

もちろん塚本を名指して批判した先生の無教会主義批判は、無教会一般に物議をかもし、多々批判も受けました。しかし、その当否は別としても、内村と塚本の信仰の相違を、人物の違いとか、その社会問題に対する態度の違いということではなく、どこまでも十字架の贖罪の福音とその信仰に関わる根本問題として論じているのは、恐らく先生以外にあまりおられないのではないのでしょうか。

先生はこの無教会主義に対する立場を生涯貫いて、個人的友情は別として、「いわゆる無教会主義」を信奉する人々とは殆ど交流することなく、毎年開催される「内村記念講演会」にも一度も参加することはありませんでした。頑なと言えば頑なかも知れませんが、先生の生き方全体がそれ程に無教會的であつた、と私は考えております。

内村に関する先生の最大の仕事は、申すまでもなく、教文館の委嘱による『内村鑑三全集』全五七巻の編集でした。一九六〇年に始まり、七三年に終つた大出版事業でした。

これは岩波書店刊初版内村全集を改編して、『聖書注解・信仰著作・日記書簡・英文著作』の四全集としたもので、内村の全著作を項目別に分類し、さらにそれを体系的に配列して、内村のキリスト教を一望のもとに収め得るようにした壮大な編集です。のみならず、内村の著作の書きかえを初めて採用し（内村美代子氏担当）、総索引（『信仰著作全集』第二五巻、事項ほか六種の索引と内村の年譜）八〇〇ページ。なお『英文著作全集』の注と索引は各巻ごと）を付するなど、先生の聖書講義にも見られる懇切な伝道的配慮がすみずみにまで行き届いた画期的な編集です。

そして先生は、この歴大な全集の一卷一卷に詳細な解説を執筆し、内村のキリスト教の本質の解明に努められました。それは集めれば、それだけで一卷の内村論になるほどのものです。書きかえ、解説には不用論など異論もあるでしょう。しかし、研究者は知らず、この内村全集は一般読者を益するところ多大であると信

じるものです。

なお、先生は『英文著作』を除く三全集の刊行が終了した時（六六年）、内村について「ようやく別の角度から端的に問題の解明に当たろうとの意図を抱き」、それまでの内村論考の集大成とも言うべき一書を執筆されました。これは「内村が生涯に当面した約三十の信仰上の実際問題」を問答体で平易明快に解説したもので、「内村のキリスト教は神が彼をもつて日本に新しく始めたもうた新しいキリスト教であると信じる」先生の、特異な「内村鑑三信仰伝」になっています。この本は前記の「ベルと宮部書簡による内村」の新訂版二書と合わせて東海大学出版会から上梓されました。『内村鑑三―信仰・生涯・友情』がそれで、一千ページに及ぶ大冊です。

先生の内村論は、弟子としての偏りをまぬかれないかも知れませんが（その批判はすでに耳にするとところですが）、内村のキリスト教とその信仰の本質を明らかにすることに固執する内村論として、その価値を失うことはないと思ひます。

山本泰次郎先生と私

私の山本先生との出会いは『聖書講義』誌の購読を通してでした。先生が同誌を復刊して間もない頃（一九五一年）で、尊敬する友人に勧められて読み始めました。当時私は既にある福音派の教会に属していましたが、その実利的信仰の有りに次第に疑問を抱くようになっていたので、『聖書講義』という名称通りの純

粹な聖書講義は実に新鮮で、私はその明晰、直截な講義によって全く新しく福音を学び直したのでした。あとで述べますが、やがて山本先生の個人的知遇も得て、私は山本先生を私の唯一の信仰の恩師として生きるようになりました。そしてもちろんのこと、先生を通して私は内村とそのキリスト教を学び、ついに自分はこのキリスト教によって生きていこうと決意するに至り、一九五六（昭和三一）年春その教会を離脱しました。

その時私は教会の中でアモス書を講じていましたが、行動を共にした数人の友人たちとその勉強を続けるに当たって、会場の固定的確保ができず各所を転々となりました。そのため誰言うことなく、アモスの出身地テコアを取って「テコア会」と呼ぶようになりました。後にそれが集会名となった「テコア聖書集会」は、その秋、山本先生が「キリスト教はどのようなようにして始まったか」と題する開講講演をして下さって正式に発足しました。冒頭に申しましたように、その集まりがちちょうど二年前に五十周年を迎えたわけです。

山本先生には次第に個人的な恩顧をいただくようになりました。聖書研究の仕方から人生の万般にわたって、先生から直接間接にお教えいただいたことは限りがありません。先生や内村から受けた信仰的人間形成の教育のいかに有難いものであったか。しかし、念のために申し上げておきますが、私は先生の日曜集会に参席したことは一度も無いのです。

山本先生が『内村全集』を編集された時には、総索引の制作を仰せつかりました。索引というものがどういうものかも知らない

無学の素人が、一巻一巻出版される度に、必死になってあれこれ一枚一枚カードを取ることほぼ十二万枚、試行錯誤を繰り返しつつ整理して何とか形にすることができたのは、ひとえに先生の忍耐とご指導の賜物です。そして、先生がなぜ私のような非力の間人にこのような仕事を与えて下さったのか、恐縮するばかりですが、一方この仕事をしなかつたら、私は到底一と通りなりと内村の著作を読み通すことはできなかつたろうと思うと、感謝は尽きません。

また、この作業の過程で、先生のご発意により、私が実務を担当して『内村鑑三・続一日一生』（教文館刊、一九六四年）を、先生と共同編集することができました。私はこの本を私の信仰告白と思っております。共編と言え、その注と索引とを担当した『英文著作全集』も、先生は私を共編者として下さいました。

前記『山本泰次郎聖書講義双書』の編集、同じく前記ご遺著『内村鑑三とひとりの弟子―斎藤宗次郎の書簡による』の「あとがき」、『無教会史Ⅱ、Ⅲ』（新教出版社刊）における「山本泰次郎」項の執筆などが、先生のご恩顧に対する私のささやかな感謝のしるしとなり得たかと願っている次第です。

むすび―出会いの幸い

「むすび」というわけでもありませんが、最後に「出会いの幸い」ということを一言申し上げて話を終りたいと思います。

内村の言葉に「生命の夕暮れになればなるほど、人は何ものか、

彼の心の奥深き所に結実しつつあるを感じる」というのがありません。いま私はその年齢に近づいて、もし私の心の奥深き所に結実しつつある何ものかがあるとすれば、それはすべて若き日の山本泰次郎先生（そして内村鑑三）との出会いに発していると、改めて強く思わざるを得ません。

人生は出会いと申しますが、聖書でも「出会い」は大切な出来事です。その典型的な事例は「ヨハネ福音書」一章の後半のエピソードで、そこにはイエスとその最初の弟子たちと、さらに弟子たちどうしの出会いが、実にいきいきと描かれています。ここで「出会った」（四一、四三、四五節）と訳された原語は、有名なアルキメデスが浮力の法則を発見した時、喜びの余り裸で風呂をとび出して「ヘウレカ」（我発見せり）と叫んだという、あの語と同じです。

この語（ヘウリスコー）は、この通りもともと「見つける、発見する」と言う意味で、「ルカ福音書」一五章の有名な三つの譬え話にも出てきます。「見失った羊を見つけた、無くした銀貨を見つけた、息子がいなくなっていたのに見つかった」と。ここで大切なことは、羊も銀貨も息子も「見つけられた」、すべて受動態であることです。羊と銀貨と息子が私どもに、羊飼いと女と父親が神に擬せられるとすれば、私どもは神によって見つけられる、神は罪の中に失われている私どもを見つけて下さる。私どもがイエスに出会うのではなく、その前に（ヨハネ一・四八）イエスが私どもに出会って下さるということです。そして発見の喜びは、まず見つけた側にあるということです。（ルカ一五・三二）。

私どもは、儀式なく、教義なく、会堂なく、組織・制度もないところで集まり、神を礼拝し、信徒のコイノニア（交わり）をもちます。そこで主に出会い、師に出会い、友人に出会います。何と幸いなことはありませんか！

個人的な話を長時間ご静聴有難うございました。

○ 本稿は二〇〇八年九月二八日、「市川聖書集会」において話したものを、少しく構成を改めて書き直したものです。

○ 本稿においては、故人はすべて敬称を省略しました。山本泰次郎先生を例外としたのは、話の便宜上のことで、ご諒承願います。（二〇〇九年一月）

（所載）『つのぶえ』第十三号

（市川聖書集会、二〇〇九年六月）